



目次

巻頭言 国立大学法人化の中で附属図書館は どう変わったか	1
特集 第7回『言語力』大賞コンテスト	3
特集 新たに指定された貴重資料	5
本との出会いを楽しむ〈第8回〉	7
図書館に関する話題〈第8回〉	8
Library News	9
本学教員等著作寄贈図書・資料一覧	11

国立大学法人化の中で附属図書館は どう変わったか

学長 遠藤 正彦



国立大学は、国立大学法人化されました。このことは、国立大学が設置形態を変え、競争と評価の中で、自主・自律することにあります。そして、特に地方大学としては、地域に密着し、地域に開かれた大学として機能分化しなければなりません。資源が少なく、財政基盤の脆弱な本学の国立大学法人化の歩みは、大変困難でありました。当然附属図書館も財政的には以前にも増して厳しいものでした。

私が学長に就任し、附属図書館長に清水俊夫教授（理工学部 平 14.4-15.5）、続いて、南條宏肇教授（理工学部 平 15.6-16.3）に就任をお願いしました。当時は、国の方針として進んでいた図書館のマイクロフィルム化が中止され、急速に進む電子図書館化、即ち電子ジャーナルの導入にどう対応するかが最重要課題でした。外国雑誌の価格の高騰が始まり、一方大学の財政逼迫が進み、このため購入雑誌の削減が迫られました。

国立大学法人化において、多くの大学が附属図書館を情報の一部署と位置付けており、本学でも附属図書館長を施設・マネジメント担当の中澤勝

三理事の併任としました。しかし、やはり附属図書館を従前のように一部局とし、雨森道紘教授（理工学部 平 17.4-18.6）に附属図書館長就任をお願いしました。理工学部教授を続けたのは、電子図書館化に最も影響を受けるのは、理系、特に理工学部だったからです。ここまでに購入雑誌の削減と、電子ジャーナル化が進みましたが、財政的問題は尚解決してはいませんでした。

その後、図書館長は医学研究科 正村和彦教授（平 18.6-20.3）に交代しました。従前より医学部分館・保健学科分室のあり方が問題であり、附属図書館本館と医学部分館の電子ジャーナル導入の連携をお願いしました。こうしてようやく、本館・分館の一元化、経費削減、電子ジャーナル導入に一定の方向が定まりました。

次に文系の長谷川成一教授（人文学部 平 20.4-）をお願いしました。長谷川館長の下で、新しい図書館のあり方の検討が進められました。本学附属図書館の電子ジャーナル導入と、経費削減による図書購入の抑制は、当然図書館の理系化が進み、一方、大学自身も産学官連携の立場から、理

系化が進みます。そこで、平成 20 年度より文系図書整備 5 ヶ年計画をたて、5 年で 1 億円を投入することにしました。これが、今年 4 年目で文系図書は確実に充実してきました。

一方、平成 16 年 6 月に発足した、弘前大学出版会は、着実な歩みを続けて、有限責任中間法人（現一般法人）大学出版部協会に加盟も許され、国立大学法人化後の大学出版会のあり方の一つのモデルと目されるに至りました。附属図書館、出版会、大学の歴史を語る資料館、そして理系の機器分析センターは、大学のレベル・アクティビティの重要なバロメーターの一つと目されています。したがって、附属図書館と出版会の良好な関係が重要で、附属図書館の中に出版会のオフィスを設けました。附属図書館は、大学出版部協会加盟の出版図書の購入を開始し、附属図書館内に大学出版部協会加盟大学出版物コーナーを設置しました。この事を伝え聞いた一部の出版協会加盟大学が驚きました。

弘前大学の前身校、青森県師範学校と青森医学専門学校は、第二次世界大戦の青森大空襲により焼失し、当時のことを現在に伝えるものはほとんど残っていません。しかし、もう一つの前身校・旧制弘前高等学校には古い資料が附属図書館始め学内数カ所に未整理のまま放置されていました。この資料の整理が、長谷川館長の指揮の下に行われました。この作業の中で「津軽領元禄国絵図写」、「太宰治の旧制弘前高等学校入学時の写真」等が発見されました。これらの資料は、弘前大学が昭和 39 年以来出陣しているねふた祭の「ねふた絵」や「太宰治自筆ノート」等と共に、新設された「貴重資料保管室」に保存されています。

本学の歴史を語る「資料館」設置の準備が、長谷川館長を委員長とする資料館設備準備委員会の下で開始されました。平成 24 年 10 月開所になり

ますが、本学附属図書館と共に、本学の重要なステータスシンボルになります。

こうした中で、附属図書館としての所蔵コレクションが増えました。「ピーターパン」の著者である英国エジンバラ大学総長のジェームス・マシュー・バリのほとんどすべての著書の寄贈を受けて作られた「ピーターパン・バリ文庫」、本学の前身の一つ青森県師範学校の卒業生で、戦後の代表的漫画家・手塚治虫、赤塚不二夫、藤子不二雄等を育てた名編集者 加藤謙一氏の遺族からの寄贈による「加藤謙一文庫」、本学 松木明知名誉教授から寄贈されたウィリアムオスラーコレクション、医学古典叢書の復刻版等の「松木文庫」があります。

学生の読書離れと共に附属図書館の学生利用の低下に対応し、閲覧室の拡張、総合情報センターのパソコン端末を置く「PC サテライト」の新設、学生が少人数で図書館資料を元にディスカッション等の行える「ラーニングスペース・スクエア」等を設置し、開館時間も延長されたため、学生の利用率も上昇しています。更に学生の読書離れを危惧し、学生の言語力向上をめざして、学生自ら書いた小説・評論・詩歌等のコンテストを行う「学生言語力大賞コンテスト」を実施しています。

国立大学法人化により、大学が自主・自律を求められる中、附属図書館は大学の教育研究の中心として、新しい機能をもって重みを一層増してきました。そして、大学が地元にかかれた大学として市民への開放、学外の他の図書館の連携も強まりました。これには、長谷川館長以下の図書館運営委員、職員等の絶大な努力の成果です。そして、最近頃に、学外からの本学の評価が高まっていることに附属図書館は大きく寄与しています。私の学長退任に当たり、関係諸氏に心からの敬意を表し、御礼申し上げます。

（えんどう まさひこ）